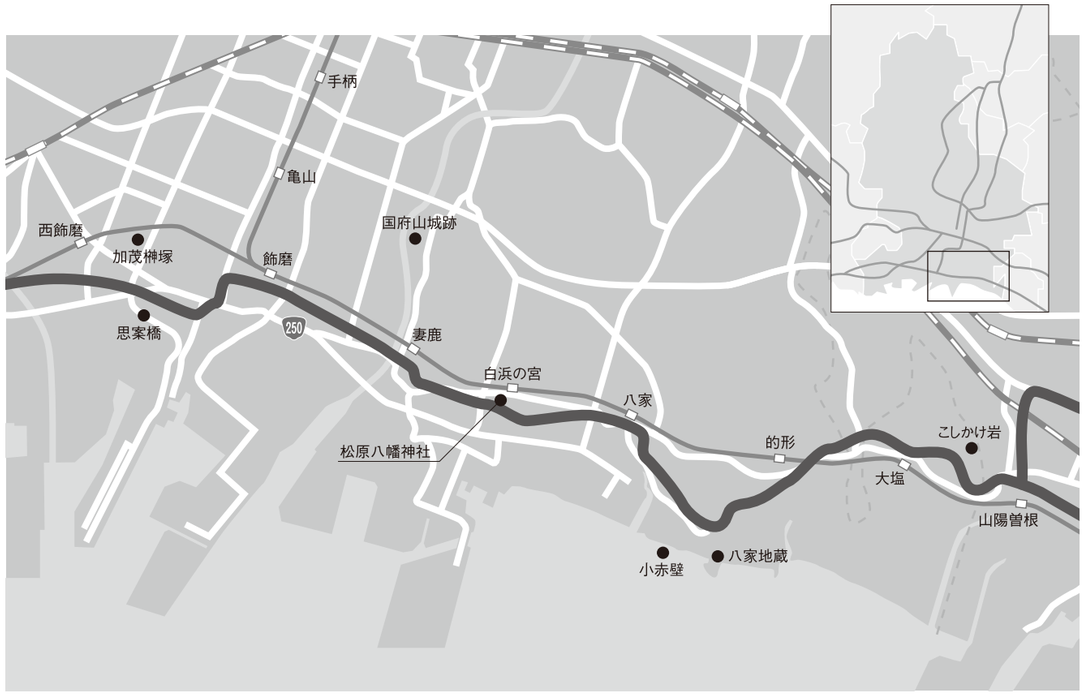
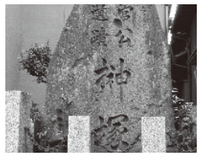
その他の道 ～浜街道～



加茂榊塚



菅原道真が大宰府へ左遷される途上で、細江に上陸し、賀茂社へ参詣したと伝えられています。出発に際し、道真が突きさした榊の杖が自生し、逆木（榊）天神として信仰されました。付近にある津田天満神社のお旅所には、道真公が休憩をとったという伝説があります。

国府山城跡

別名、妻鹿城、功山城。天正８年（１５８０年）、毛利攻めの拠点として姫路城を羽柴（豊臣）秀吉に差し出した黒田官兵衛は、父・職隆が隠居していた国府山城に移り住みました。近くには「チクゼンさん」と呼ばれる五輪塔があり、職隆の墓塔だと伝えられています。

松原八幡神社

羽柴（豊臣）秀吉が松原八幡神社を芝原（現・豊沢町）に移すよう命じたとき、黒田官兵衛は松原が由緒ある地であると諭し、神社はこの地にとどまることができたと伝わっています。

また、神社があった場所はかつて松林で「粟（お）生の松原」と呼ばれていました。古歌には「あふの松原」と詠まれ、「あふ」が「逢う」に転じて「恋の浜」とも呼ばれました。

小赤壁

木庭山、姫御前山、燈籠地山の南側の海岸は、高さ40m、長さ約800mにわたって荒波に浸食された奇岩がいたるところにある絶景です。頼山陽がこの地を訪れ、月夜に船を浮かべ風光を楽しんだ際、中国揚子江にある赤壁にちなんで命名したと伝えられています。付近には八家地蔵があります。

こしかけ岩

日笠山のふもとにある岩神社にある岩。その名の由来は、菅原道真がこの岩に腰を掛けたからとも、輿をこの岩に置いたからともいわれています。

播磨を訪れた旅人たち

播磨の国司として滞在

柿本人麻呂　斉明天皇6年（660年頃）ー養老4年（720年頃）

飛鳥時代の歌人

『万葉集 11巻』

あひみては　ちとせやいぬる　いなをかも　われやしかもふ　きみまちかてに

訳：逢ってから千年もたったのでしょうか、いや違うかな。私がそう思うのかな、あなたを待ちかねて。

柿本人麻呂は播磨の国司だったころ青山に住んでいたといわれています。人麻呂が奈良へ出かけた際、妻が石見から訪ねてくる夢を見て急いで引き返したという伝説があります。戻って妻を見た場所は「妻見ヶ丘」と名付けられ、今に残る人丸神社が建立されました。

『伊勢物語』の主人公としても知られる

在原業平　天長2年（825年）ー元慶4年（880年）

平安時代初期の貴族・歌人

『増位寺集記』

播磨路や糸の細道わけゆけば砥堀に見ゆる有明の月

貞観17年（875年）9月の増位山随願寺山王祭のとき、業平は勅使として訪れ、滞在中に有明峯（増位山の東の峯）でこの歌を詠んだといわれます。糸の細道とは砥堀から有明山までの道を指していると考えられます。この業平の歌からこの峰を有明の峰とも有明の山とも呼ぶようになりました。

播磨を訪れた旅人たち

円教寺に歌塚が残る

和泉式部　生没年不詳（平安時代中期）

平安時代中期の歌人

『拾遺集』

性空上人のもとに、よみてつかはしける
暗きより暗き道にぞ入りぬべき遥かに照せ山の端の月

訳：煩悩の道から煩悩の闇へと迷い込んでしまいそうだ。
　　どうか山の端の月よ、はるか遠くの道まで照らしてほしい。

和泉式部は一条天皇の中宮・藤原彰子やほかの女房たちと性空上人に会いに書写山を訪れましたが、会ってもらえなかったので、寺の柱にこの和歌を書いて立ち去ろうとしました。歌に感心した性空上人は一行を呼び戻し、丁重に教えを垂れたと伝えられます。円教寺の奥の院に式部の歌塚が残っています。

平安時代の漂泊の歌人

西行　元永元年（1118年）―文治6年（1190年）

平安時代後期の歌人・僧侶

『山家集』

播磨の書写へまゐるとて、野中の清水を見けること、一昔になりにけり。年経て後、修行すとて通りけるに、同じ様にて変らざりければ
昔見し　野中の清水　かはらねば　わが影をもや　思ひ出づらん　下巻　雑

訳：昔見た野中の清水は、今も少しも変わっていないから、映してみると、私の顔もそして昔ここを通った折のことも思い出してくれるだろう。

時期は分かりませんが、『山家集』には西行が書写山、飾磨を訪れたことが分かる記述があります。「野中の清水」は播磨国印南野にあったという清水のこと。今も、神戸市西区岩岡町野中に「野中の清水」と呼ばれる琵琶湖の形をした池があります。

遊行の生涯を送った

一遍　延応元年（1239年）―正応2年（1289年）

鎌倉時代の僧侶で、時宗の宗祖

『播州法語集』

一遍上人播磨御渡りの時、御法門聞書
弘嶺八幡宮にて、言語道断心行処滅の心を
いはじたゞ　ことばのみちを　すぐゝと　ひとのこゝろの　ゆくこともなし

訳：一遍上人が播磨にお渡りの時の御法門の聞き書き
　　廣峯神社で、言語を絶し思慮の超えたところに念仏の境地（悟りの境地）があるという心を（次のように詠まれた）。
　　何も言うまい。ただ、ことばだけですらすらと説いて、人の心に納得のゆくことがあろうはずがない。（念仏というものは、言葉や理論だけによって得心のゆくものではない。言語・理論の絶えはてた、その彼方に念仏の本来の面目が見いだせるのである）

一遍上人は、兵庫県下に多くの足跡を残しており、和田岬の観音堂で51歳の生涯を終えました。弘安10年（1287年）、書写山に参詣した一遍上人は、かつて後白河法皇が拝したほかは、誰も見ることのなかった本尊を許されて拝し、「諸国遊行の思い出、ただ当山順礼にあり」と言って感動したといわれます。

当代きっての文化人・教養人

細川幽斎　天文3年（1534年）―慶長15年（1610年）

戦国時代から江戸時代にかけての武将・大名・歌人

『九州道之記』

明け方を待ちて舟を出だし、家島を漕ぎ巡るとて、
いかばかり　舟よそひして　漕ぎ寄せん　わが家島と　思はましかば

訳：どんなにか立派に出船の装いをするだろう。家島が我が家であったならば。

細川幽斎は、天正15年（1587年）の春、九州征伐の陣に参加するために、丹後国田辺城から博多まで日本海を航海しました。約40日を九州で過ごし、羽柴（豊臣）秀吉の帰還に伴い、瀬戸内海の名所を回りながら難波の港に着きました。『九州道之記』はこのときの紀行文で、家島に立ち寄った際に詠んだ歌が記されています。

播磨を訪れた旅人たち

黒田官兵衛の播磨時代を調査

貝原益軒　寛永7年（1630年）ー正徳４年（1714年）

江戸時代の儒学者・教育家・本草学者

『東路記』

姫路の西一里に青山とて小き松山有。其南の村を青山村と云。是、黒田如水の陣所なり。青山は名所也。古歌あり

訳：姫路から西へ約7㎞行ったところに青山という小さな松の山がある。その南にある村を青山という。これは、かつて黒田如水の陣を構えたところだ。青山は古くは歌にも詠まれた名所である。

『東路記』は地理、歴史、自然景観を交えた紀行文です。貝原益軒は、当時すでに黒田家の播磨時代を調べた『黒田家譜』を完成させており、青山の記述に当たって官兵衛が赤松政秀を破った青山合戦にも触れています。

オランダ商館付の医者として来日

ケンペル　1651年ー1716年

ドイツの外科医・博物学者

『日本誌』（「江戸参府旅行日記」）（和訳）

5海里進んで姫路地方に達したが、正午を過ぎるとすぐに風向きがすっかり悪くなったので、網干付近を通り過ぎた所で、また引き返すことになり、午後3時に室に着いた。姫路では立派な大天守閣のある城が見えたが、網干には幕府の倉庫がある。けれども、この2つの町には港がない。両方とも海底が泥深く、石が多くて、うまく錨を下ろせないからである。

ケンペルは、元禄4年（1691年）とその翌年の2回、長崎・オランダ商館長の江戸参府に従い、日本国内を旅行しました。2回の旅行ともその往復のすべてが海路であったため、室津以外の播磨の記述は、船上で眺めた景観と通詞から得た知識がもとになっています。当時の様子を記した『日本誌』は、生前には世間に出ることなく、1727年に英訳本がロンドンで出版されました。その半世紀後にドイツ語版が出版されると、ゲーテやカントなどの日本観に大きな影響を与えました。

全国測量の旅で播磨へ

伊能忠敬　延享2年（1745年）ー 文政元年（1818年）

江戸時代の地理学者・測量家

『関西旅行記』

青山一り西、坂本村ニて中飯。書写山円教寺へ登ル。桀ニ坂本三王有。十八丁上テ本堂あり。御朱印八百三十石、本坊の外三十坊あり。（中略）坂本村より五十丁行、姫路城下ニ至る。姫路福井町井筒屋太兵衛ニ泊。

訳：青山から西へ約７㎞行ったところにある坂本村で食事をとり、書写山円教寺へ登った。ふもとに坂本山王（日吉神社）がある。2㎞ほど上がると本堂がある。ご朱印高830石、本坊のほか30もの坊がある。（中略）坂本村から約５㎞行くと姫路城下に至る。福井町の井筒屋太兵衛の家に泊まる。

伊能忠敬は49歳で隠居し、幕府天文方高橋至時に入門する前は、酒造業、運送業、金融業などで成功した事業家でした。寛政5年（1793年）、近所の知り合いと関西へ遊覧の旅に出かけ「関西旅行記」を残しています。ちなみに測量を始めたのは寛政12年（1800年）。瀬戸内の島々と沿岸の測量を行ったのは文化2年（1805年）のことで、「測量日記」には、測量のために姫路藩が船を準備したことなどが記されています。

俳諧修行で全国を行脚

小林一茶　宝暦13年（1763年）ー文政10年（1827年）

江戸時代を代表する俳人

『西国紀行』（寛政紀行）

姫路の城を通る、書写より一里なり、先づ音に聞く名城を見て、豆崎より高砂、曽根の別れ道につく、曽根の松は菅公の植へ給ふと、惜しいかな、片枝枯れてあれば

散松葉　昔ながらの　掃除番

訳：書写から約7㎞先の姫路城を通る。うわさに聞く名城を見てから、豆崎から高砂、曽根の分かれ道に着く。曽根の松は菅原道真の植えたものだという。惜しいことに片枝が枯れていた。
「今年もまた、昔から行われてきた松葉の掃除をする時期になったなあ」

小林一茶は、寛政4年（1792年）から俳諧修行のために近畿、四国、九州などを歴遊しました。寛政7年（1795年）には播磨を訪れ『西国紀行』を記しました。

播磨を訪れた旅人たち

河合寸翁とも親交があった

大田南畝　寛延2年（1749年）ー文政6年（1823年）

江戸時代の狂歌師、戯作者、幕臣

『革令紀行』

これよりたゞちに望めば、姫路の城の天守高くみわたされて、風景いはんかたなし。川をわたりて姫路の城下に入りて、鍵屋久兵衛がもとに昼餉くふ。

訳：市川から見ると姫路城の天守が高く見渡されて、その素晴らしさはたとえることができない。川を渡って姫路城下に入り、鍵屋久兵衛のところで昼食をとった。

大田南畝は、文化元年（1804年）、長崎奉行所への出役を命じられます。出発前に名所・旧跡についてよく調べ、旅中にも克明なメモをとったと考えられ、往きには『革令紀行』、帰りは『小春紀行』と題する紀行を書き記しました。

姫路を訪れた弥次さん、喜多さん

十返舎一九　明和2年（1765年）ー天保2年（1831年）

江戸時代の戯作者

『播州膝栗毛』

北八「雪国の女ハどふでも色が白い。この美しいおむすにこんな難所をあるかせるといふハ、可愛そふだ。わつちがおぶつてやろうかね」
娘「インネハア。よくござるハ」
弥次「そんならおいらが手をひいてやろう。ノウとつさん、今夜ア定て姫路泊だろうから、一所に宿をとりやせう」

書写山を目指す途中、旅人らしい父と娘に出会い、首尾よく姫路城下で同じ宿に泊まることになった弥次さん、喜多さん。深夜に忍んで行こうとし、狸に化かされて大騒ぎになりました。

享和2年（1802年）に弥次・喜多を主人公に書き始めた『東海道中膝栗毛』が大評判となり、およそ20年書き継がれました。京、大阪の編が終了すると、四国金比羅山道中、宮島に及び、いよいよ播磨編になるはずでしたが、読者の要望が強い木曽路に取り掛かることを強要され、播磨の部分は後に書き足されました。

日本研究に大きな足跡を残した

シーボルト　1796年ー1866年

ドイツの医学者・博物学者

『江戸参府記』（和訳）

室の港は、東北に入り曲がっているせまい入江からなり、その背後に小さい室の町が広がっている。入江の入り口の右（東側）の岩の上に番所があり、その下の巨大な石で築いた石垣の上に、港の入口を掃射する砲台が作られている。番所の前に羽根飾りのついた10本の槍と両側に4本ずつの鞘をつけた普通の槍が立ててあった。向こう側すなわち西側には数本のマツのはえた岩の多い半島がそびえていて、山根崎（Jamane）といい、その斜面に数件の売春宿がある。このふたつの地点が港の入口をなしている。

シーボルトは文政6年（1823年）、長崎出島のオランダ商館付の医師として来日し、文政9年（1826年）、オランダ商館長の江戸参府に同行しました。一行は室津から陸路に変更し、姫路や高砂などに立ち寄りながら大阪へと向かいました。博物学者らしく、目に入ったものをすべて写し取ろうとしたシーボルトの手記は詳細なもので、地図、絵図、図版なども収録されています。帰国の荷に日本地図など禁制の品が含まれていたことから国外追放になりました。

河合寸翁との交流があった

頼山陽　安永9年（1780年）ー天保3年（1832年）

江戸時代後期の日本を代表する儒学者・史家・漢詩人

『山陽遺稿』

阿彌陀駅址。備後守 児嶋範長義に死するの処なり
（略）誰か大筆を将て　此の老を旌し、豊碑　高く照らさん　山陽道。

訳：阿彌陀駅址は備後守 児島範長が討ち死にした場所である。
（略）この老臣の功績を表彰し、立派な碑を建てて山陽道を照らしてほしい。

頼山陽は河合寸翁と知友の関係で、文政7年（1824年）から天保2年（1831年）にかけて4回、姫路の仁寿山校へ出講しています。文政10年（1827年）、仁寿山校を辞して京都へ帰る途上、別所にある六騎塚で、南北朝争いの際、後醍醐天皇に味方してこの地で自害したと伝えられる児島範長を称える詩を作りました。また、木場の海岸に船を浮かべて風光を楽しんだ際、高さ40m、長さ約800mの断崖を中国揚子江にある赤壁にちなんで「小赤壁」と命名したと伝えられます。

幕末の志士を育てた

吉田松陰　天保元年（1830年）ー安政6年（1859年）

幕末の志士、長州藩士

『東遊日記』

一、十七日　晴。卯時、城を発す。姫路・市川の間に、固寧倉二つあり。名に因て実を知るべし。舟にて市川を渡り、石宝殿を過り見る。午前、舟にて加古川を渡る。老臣河合如水在職の時に堤防を修むと云ふ。

訳：一、　17日、晴れ。明け方城を出発する。市川までに固寧倉が2つある。その名によってその実質を知ることができる。船で市川を渡り、石の宝殿を通りすぎる。午前、船で加古川を渡る。河合寸翁が堤防を築いたという。

嘉永4年（1851年）、松陰は藩主毛利敬親の参勤交代に随行し、初めて江戸への遊学の旅に出ました。3月16日には姫路城中に宿泊しています。また、嘉永6年（1853年）にも諸国遊学の旅中に播磨灘を船で通過しており、古来難所とされる播磨灘が静かだったことから、「天幸」を喜びながらも、安穏さに慣れるようなことがあってはならないという意味の漢詩を日記に書き記しています。その後、安政の大獄で江戸送りとなった旅の途上、姫路を通過したことが分かる漢詩を残しています。

母といっしょに諸国漫遊

清河八郎　天保元年（1830年）ー文久3年（1863年）

庄内藩出身の尊攘派志士

『西遊草』

浜のきわにて八家の地蔵を見る。大なる石仏なり。千年ばかり已然に亀の甲羅に乗りて海中より浮かみいずるぞ。

訳：浜の際で八家地蔵を見た。大きな石仏である。千年ほど前に亀の甲羅に乗って、海中から浮かんできたといわれる。

安政元年（1854年）、私塾を火事で失った清河八郎は、親孝行にと母の亀代をお伊勢参りに連れだしました。伊勢を過ぎ、京都、大阪、奈良を巡回し、さらに金毘羅などの西国に旅を続けました。『西遊草』は母がこの旅を偲ぶため、また妹や弟が伊勢参りをするとき役立てようとして書かれたもので、八家地蔵や六騎塚についての記述があります。

播磨古道調査報告書 ──物語のある道──
平成28年（2016年）3月

発行／姫路市 市長公室 企画政策推進室
〒670-8501 姫路市安田四丁目1番地
TEL 079-221-2206
http://www.city.himeji.lg.jp/